

「特別の教科 道徳」公開研究会におけるシンポジウム質問事項の回答

回答については、シンポジストで確認をし、代筆を本校道徳教育推進教師の藤永啓吾が学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」等を踏まえてさせていただいております。また、光中学校として回答できる質問については、本校で実際に取り組んでいることを踏まえてさせていただいております。ただし、回答全てが模範的なものというわけではなく、あくまで多様な考えの中の一つであるということをご理解ください。なお、質問内容については記述形式を統一していることをご了承ください。

① 授業に関すること

- めあては示したほうがよいか？

示すことは望ましいことだと考えます。光中学校では「テーマ」という形で示しています。また、めあてとは授業の目的のことをいいます。何を目的とした学びなのかを授業者も子どもも把握できると、より一層豊かな学びにつながると言えます。大切なのはどのように示すかであり、「思いやりを学ぶのです」「きまりの大切さを考えるのです」というように断定的な示し方は押し付けにつながるため望ましくないと考えています。また、授業者の授業力が高まれば、めあてを示さずとも、子どもにめあてを把握させていくことができますので、最終的には、そういった授業力を身に付けていきたいとも考えています。

- 終末に価値や学びは押さえるべきか？

押さえるべきということはありません。価値理解を授業内のどこで行うのかはその時々で異なります。また、何を学んだのかという振り返りは、終末時に行うことが望ましいと考えます。

- 道徳科の授業の終わり方がわからない、最後がふわふわしていて自信がもてないという先生に対して、どのように支援したらよいか？

「学んだことで何が特に心に残っていますか？」という言葉がけから振り返りの時間につなげてみてはいかがでしょうか？その後、授業者と共に子どもの振り返りを読んで、ねらいに関わっているか、子どもの心に残っているか、生活につなげようとしているか、人間としての生き方や自己の生き方を考えようとしているか等を視点として、授業を振り返ってみてはいかがでしょうか。

- 道徳の時間の最初（1時間目）で伝えることとは何か？

道徳科がどんな時間なのかを伝え、考え、決めていくガイダンスの時間を設けてみてはいかがでしょうか。例えば、理科を担当している場合、理科は何を学ぶのかと尋ねられると、自然現象の理を探究していく時間であると答えることができます。その他の教科に関しても、何を学ぶのかについてのイメージは、とても湧きやすいのではないのでしょうか。しかし、道徳科はどんな時間なのかについては、イメージが湧かない人が多いのが事実としてあります。また、そのことが原因となり、授業者にとっても子どもにとっても、何をどうしていけばよいのかがわかりにくい時間となっているとも言えます。光中学校では、道徳科の時間を「人間的な魅力を探す時間」として位置付け、ガイダンスの時間を全学年で取り組んでいます。ぜひ、子どもと共に、どんな時間にしていくのかを考える時間にしてはいかがでしょうか。

- 話し合いの仕方が発言ができない子どもがいる。発言しやすい工夫やルールづくりにはどのようなことがあるか？

道徳科に限らず、教科、領域等を見ても、級友との対話に苦手さを感じている子どもは少なくありません。この解決に関しては、学校全体で協議していくことをお勧めします。例えば、話をする順番と時間を決め、流れの運営を授業者が行い、話をする訓練をしている教科、領域等があります。対話は自然とできる子どももいれば、訓練が必要な子どももいます。大人もそうです。また、対話に関して、授業者は広義的な意味があることを認識する必要があると思っています。対話には、級友との対話以外に授業者との対話、教材との対話、教室にある空気感との対話、自然との対話、そして自己内対話等があります。人と対話が難しくても、自分の考えを文字言語として表出したり、しぐさで表現したりする子どももいます。多くの対話を積極的に認め、価値付けていくことから始めてはいかがでしょうか。

- 教材研究を大切にしているが、発問づくりにいつも苦勞する。よい方法はないか？

方法はいくつかありますが、発問とは苦勞して吟味するものです。だからこそ、よりよい発問ができると思っています。光中学校では月に一度、「特別の教科 道徳」学びの会を実施しています。ぜひお越しください。共に考えていきましょう。

- 道徳科で考えたことを、今の自分と照らし合わせる具体的な方法とはどのようなものがあるか？

光中学校で作成しているワークシート下段が、今の自分と照らし合わせる方法と考えています。また、終末に「今日の学びの中でどのようなことが心をゆさぶりましたか。そのことに合わせて、今日の学びを振り返ってください。」という問いかけを行い、振り返りにつなげていくことも、効果的な方法だと考えています。

- もの静かなおとなしい学級で、積極的な発言がない。どのようにして積極的な発言を促しているか？

授業の始めに、授業に関わる発問を促し、全員発表を短時間で終わらせることが効果的だと考えています。その繰り返しが発言するための訓練となります。

方法は、①発問を促す。②全員立たせる、③一人一人にテンポよく答えさせる。

また、発言させていく以上に大切な事として「聴く」を重視しています。発言者のほうを見たり、相槌をうったりと、発言に対して反応しながら「聴く」ということです。これができるようになると、発言しやすい環境になります。

- ホワイトボードを使って、班の中で意見をまとめさせたり、個々の意見を書かせて共有させたりしているが、書く時間がかかるため、どのようにしたらよいか。

書く内容を単語にさせると効果的です。予想ですが、子どもは論理的にわかりやすく文章を書こうとしているのではないのでしょうか。他者に分かりやすくという視点で、文章を書く子どもは多いです。そのため、全体での共有時間や、対話の時間を設けることが困難となります。しかし、単語で書かせると、短時間で終わることができ、全体での時間に単語に込められている思いを引き出す時間が取れます。また、班の中で意見をまとめるということについて、道徳科において、個々の意見をまとめるということは望ましくないと考えています。

- 子どもが抱く価値観が明らかに社会的に逸脱していることがあるが、どうしたらよいか。

してはならないことは、してはならないと指導します。これは、特に小学校低学年で重視されています。しかし、道徳科の中において、突然社会的に逸脱した発言があった場合、授業者は困ってしまうと思います。その時は「それは〇〇という理由で、よくないです」と根拠と合わせて伝えてみてはどうでしょうか。また、TTでの取組も効果的です。子どもの反応に対して返答に困ってしまうときには、T2に助けてもらったり、その場で一緒に考え、明確な返答がその場でできなくても、「本当にその言葉は大切なのか？」ということを感じる場面を設けることができます。

- 小学校で価値が大事だからそうすべきだと、一面的な意見で全員がまとまってしまうことが多い。教師がゆさぶると、子ども同士で更に団結して意見を変えようとしなないことがある。異なる視点を引き出すには、どのような発問をすればよいか。

立ち位置を変えた発問を促すことが効果的です。Aさんについて考えを深めていくと、Aさんに関係する価値観で固定してしまいがちです。しかし、「Bおじさんの立場はどうなのかな?」「C社長は?」と問うと、価値観を変えざるを得ない状況になるのではないのでしょうか。

- 自分のことを振り返る発問は、どのように問うとよいか?

自分の事を振り返るには、東京学芸大学大学院教育学研究科 教授 永田繁雄氏が提唱されています発問の立ち位置の4区分（共感的発問、分析的発問、批判的発問、投影的発問）を参考にするのはいかがでしょうか。例えば、「自分だったらどう考えるか?」「今の自分はどうか?」「あの時の自分に何か助言するなら、どんなことを伝えるか?」等と問うことも考えられます。

- 内容項目（主題）とテーマの関りや違いについて、生徒から見て混乱をきたさないかが気になる。これを、どのように考えるか?

子どもにどのように示すかによると考えます。内容項目とは「人間として他者と共によりよく生きていく上で学ぶことが必要と考えられる道徳的価値を含む内容を、短い文章で平易に表現したもの」であり、主題とは「ねらいと教材で構成したものであり、授業の内容が概観できるように端的に表したものです。光中学校ではテーマを主題と同意のものと位置付けてテーマのみを示しています。しかし、子どもに内容項目を示し、主題も示し、異なる意味でテーマを示すのであれば、混乱をきたします。何を示すのかを校内で協議して取り組むことが望ましいと考えます。

- 光中学校の指導案で、主眼の文末表現を「〇〇を育むことができる」と設定した経緯とは？また、評価とのつながりは？

光中学校における主眼とは、道徳科における主な学習内容とねらい（道徳科の内容項目を基に、ねらいとする道徳的価値や道徳性の様相を端的に表したも）を合わし、端的に表したもとしています。また、ねらいに向かっていたいという思いを込めて授業を構成しております。そのため、道徳科の目標に合わせて「育む」、向かった姿を想像し「できる」という表現で設定しています。どのような文末表現にするのかは各校及び授業者の裁量でよいと考えていますので、多様な表現を見出していくことが望ましいと考えます。

評価とのつながりに関しては、ねらいに向かおうとする姿、ねらいを基に多様な考えをしようとする姿、ねらいを軸として多様な考えをしようとする姿を積極的に認め、励ませるようなつながりを意識し、端的に表しています。

- 本音が語れるというお話がありましたが、「何でも話せる友達がない」という子どもがいる中で、「何でも本音が言えることをよい友達」と考えている子どもがいる。本当に本音が語れるのか？

本当に本音が語れるのか？という疑問から、価値理解や他者理解、人間理解を考えていく学びが道徳科にあります。ぜひ、子どもと考えてみてはどうでしょうか。また、本音というのは「本心から出た言語」であり、本当の気持ちが現れたものと言えます。それは他者に対する本心の場合もあれば、自分に対する本心という場合もあります。家族や社会、自然や命に対する本心の場合もあります。更に、語るということについても、狭義で考えると「音声言語」ではありますが、広義で捉えると「文字言語」も含まれるのではないかと考えます。日頃から子どもの様々な表出の仕方を積極的に認め、教室の中で本音が語れる関係性をつくっていきたくと考えています。

- 道徳の時間の充実とは、何をもって充実というのか？

充実とは「豊かに備わっていること」であり、備わるに対する主語は道徳性だと考えています。子どもが道徳科の時間や道徳教育の中で道徳性を育てていたり、育もうとしていたりする学びが充実といえるのではないかと考えています。その充実に向けて、日々考えていくことが授業者には求められるのではないかと考えます。

- 学んだ道徳的価値を行事や生活の中で具現化できるようにするには、どのように支援が考えられるか？

普段の生活の中で、学んだことが具現化されている状況を探し、価値付けます。その繰り返しで具現化率が高まっていくのではないかと考えています。ここで押さえておきたいことは、学んだからといって、直ぐに具現化できるものではないということです。子どもによっては直ぐに具現化できる子どもがいる反面、時間がかかる子どももいます。一人の大人としてそのことを十分に理解し、具現化されている状況を探そうと積極的に働きかけることが大切だと考えています。また、一人の具現化された言動を価値付けると、それに感化された子どもの言動は変わっていくかもしれません。それを増やしていくことが、行事や生活を豊かにすることにつながるのではないかと考えています。

- 振り返りまでを授業時間内におさめるためのコツは？

場面ごとにタイマーを使うことです。時間認識を高めるには時計やタイマーを使うことが効果的です。また、導入を短くする、教材を事前に読ませておく等があります。更に、展開時にワークシートやノートに書く時間を短くするのもコツだと考えています。子どもの書く時間は予想以上に時間がかかることが多いです。ただ、道徳科における目標は書くことではなく、道徳性を育むことです。道徳科の目標を基に、授業構成を見直してみることも一つのコツだと考えています。

② 諸計画等に関すること

- 年間35時間に対して、22の内容項目があるが、13時間をどのように設定するかは、道徳教育推進教師や授業担当者の裁量でよいのか？（例えば重点項目を多く行う等）

13時間の設定については、道徳教育推進教師や授業担当者の裁量で行うことについては望ましくありません。年度初め（年度末も含む）に、校長の方針の基、学校（学校全体及び学年単位）における道徳教育重点目標を設定し、その目標に基づいて13時間の設定を行うことが望ましいと考えます。

- 校内で実施したアンケート項目に「道徳の時間」で学んだことを日々の生活に生かそうと心がけているか」というものがあり、肯定率が半数を上回る結果がでた。しかし、他の項目と比べると、「よくあてはまる」と答えた子どもの数は少なかった。道徳の時間を日々の生活につなげていく手立てにはどのようなものがあるか？

特別活動とつなげていくことが効果的だと考えています。本研究会における道徳教育推進教師の発表でもあったように、道徳科で学んだことを一週間の週目標と関係付けしていくと、子どもも大人も道徳科における学びを意識するようになり、それが行為へとつながってくるのではないかと考えています。また、質問内容については、道徳科における全体的な学びを指しているのではないかと感じました。もしかすると、子どもが学び全体を包括的に捉え、「そんなことは難しいよ」と感じたのかもかもしれません。子どもに問うときには、具体的な内容のほうが望ましい場合が多いと認識しています。

③ 評価等に関すること

- 文字や文章以外での評価方法はあるか？

あります。子どもの行動や表情の見取りです。また、小学校低学年であれば色鉛筆で色の変容を見たりすることも効果的です。

- 道徳科の評価は「道徳科の時間の中だけ」のことを評価するべきか？

道徳科の時間における学習状況や道徳性に係る成長の様子を積極的に受け止めて認め、励ましていく評価となります。

- 毎回の授業の際の評価はどのようなものがよいか？

ワークシートやノートにコメントを書いたり、言葉がけをすることが望ましいといえます。大切なのは、その評価に対して子どもが励まされたと感じるかかどうかです。ぜひ、励ましにつながる取り組みを考えてみるのはいかがでしょうか。

- 概念的なことについての評価基準を設定することが難しい。どのような評価したらよいか？

子どもの個々の事象に対してもっている概念を全て正確に見取ることは極めて困難と考えています。校長の方針の基に定めた評価の視点を基に、できる範囲で積極的に受け止めて認め、励ましていく評価を行うことが望ましいと考えます。

- 授業内容で得られた自己変容を評価記述に結び付けるにはどのようにしたらよいか？

自己変容について、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかで見取り、子どもが励まされたと思ってもらえるような記述を考えていくと、授業内容と評価が結びつきます。

- 書くことが苦手な子どもに対してどのように評価したらよいか？

授業前に授業のねらいに関わることを聞き、授業後に授業内容で感じたこと、得られたこと、心に残りそうなこと等を聞いてください。書くことが苦手な子どもには、対話で変容を見取っていくことが効果的です。また、授業中に体が前のめりになったり、級友の発言を顔を向けて聞いていたということも、成長の様子が見て取れるのではないのでしょうか。

④ 組織に関すること

- 道徳科は各教科、総合的な学習の時間、特別活動等の全ての教育活動に関連していると思うが、それを道徳教育推進教師一人で整理するのは難しい。どのような体制を校内でつくるのがよいか？

まずは別葉を作成することが整理につながります。そして、別葉を活用することです。また、道徳教育推進教師一人が整理するということはありません。道徳科を要にしていくなめには、校長の方針を明確にし、道徳教育推進教師を中心に指導體制の充実を図るとともに、道徳科の授業への校長や教頭などの参加、他の教師との協力的指導、保護者や地域の人々の参加や協力などが得られるように工夫していくことが望まれます。まずは、校長を含む校内運営委員会(学校によっては企画委員会や主任会と呼ばれています)で検討していくことが望ましいと考えます。

- 全教職員が「道徳」に関心をもてる研修体制をどうやってつくるか？

全教職員が参画できる組織を設けることです。人は当事者意識をもつと、多かれ少なかれ関心を抱きます。また、研修会については模擬授業を含めた会をお勧めしています。現在私は、様々な研修会や講演等で講話をさせていただく機会を頂いております。その中で大切にしていることが模擬授業です。ぜひ、体験してみたいはかがでしょうか。

- 本校の子ども用アンケートをHPで閲覧することはできるか？

公開はしておりません。ご連絡いただくと、ご紹介いたします。

⑤ 多方面に関わること

- 先進国の学校教育の中で、日本の道徳教育のようなことは行われているか。また、日本の取組は最先端をいつているのか。

道徳教育と同様の取組を行っているかどうかはわかりません。しかし、品格教育を重視している国があることを学んだことがあります。また、宗教における教を重視している国も多々あります。日本における道徳教育で大切にされていることの中に「道徳性を育みながら他者と共によりよく生きる生き方を考え学んでいく」ことがあります。そのようなことを大切にしている国は多いのではないかと考えます。最先端についてはわかりません。